

日本基督教団 東中国教区ニュース



東中国教区
教区ニュース誌委員会
〒110-0045
東京都港区新橋一丁目
倉敷キリスト教会館内
TEL 03-6421-2780

巻頭メッセージ

「クリスマス恵みの」

玉野教会 山本博之

「主をたたえよ。主はあなたを見捨てることなく、家を絶やさぬ責任ある人を今日お与えくださいました。どうか、イスラエルでその子の名があげられますように。」
(ルツ記四章一四節)

今年で三年目を迎える玉野教会「クリスマスの集い」は、教会聖歌隊の他、市内の合唱団・コーラスの方々にも参加していただき、教会員と地域の方々が共に主のご降誕を祝う会として定着しつつあります。案内チラシはもとより、参加者の口コミによって毎回一四〇名程の人々が教会に集われていることは大きな喜びであり、教会が地域に開かれていることを発信する絶好の機会となっています。ジュニア聖歌隊の可



愛らしい歌声や指揮者によって合唱団員一人ひとりの歌声が一つにまとめ上げられた素晴らしいハーモニー、そして、会衆者

全員で奉げる讃美が会堂一杯に響き渡るのです。

ところで、一九世紀のフランスの農民画家ジャン・フランソワ・ミレーの父親は村の教会の讃美指揮者をしていたということをご存知でしょうか。名作「落穂ひろい」は、旧約聖書のルツ記を題材に描かれていることは多くの方の知るところでしょう。

最愛の夫を失ったルツは、夫と二人の息子を失った姑のナオミから再婚の機会を与えられてもなお実家に帰ることを拒み、ナオミと共に舅の故郷ベツレヘムの町へ行くこととなります。そこでルツは、ナオミの生活を支えるために、落穂拾いの仕事を始めたのです。その畑の所有者が、図らずも舅の遠い親類にあたるボアズであり、やがてルツは神の導きによってボアズと結ばれ、二人の間に「ひとりの男の子」オベドが生まれます。

ルツ記四章一三節には、「主が身ごもらせただけで、ルツは男の子を産んだ。」とあります。つまり、「ひとりの男の子」の誕生は、神様の御計画であったことが強調されているのです。それゆえ、ナオミの女友



達は冒頭の言葉「主をたたえよ。主はあなたを見捨てることなく、…」と主を賛美したのです。

「オベド」という名は、「しもべ」という意味です。これは、やがて神のしもべとして遣わされる真の救い主、イエス・キリストを指し示しています。神を知らなかったルツが、ナオミを通して神を知り、キリストの系図に加えられることが神の御心であったのです。なんと、このように幸いでしょうか。神の子キリストは、苦難の中を歩む者、病に苦しむ者、それら私たち全ての魂を救うために、天より地にくだり、人としてお生まれになりました。それがクリスマスの喜びなのです。

人の思いを超えて働かれる神の御業を信じて、祈りのうちにある隣人と共に、主の教会でクリスマスの祝いができますように。

★セクシュアル・ハラスメント相談窓口

毎月第3水曜日 午前9時～午後9時
電話番号 090-13330-8730

目次

巻頭メッセージ「クリスマスの恵み」山本博之	1
三役による各地区集会所安の報告	2
教区伝道協議会に参加して	3
第3回教会再建ワークキャンプ報告	4
教師と信徒の合同研修会報告	5
教会紹介・光明園家族教会	5
教会紹介・米子錦町教会	7
東中国教区按手礼式報告・編集後記	8

三役による各地区集会問安のご報告

教区書記 中井大介

去る第六十四回教区総会において常置委員会の信徒並びに教職の構成割合に関して問題提起がなされました。昨年度、常置委員会からの情報発信が不十分であったことに起因して教区運営が混乱したことを反省するとともに、このたびの問題提起について、今年度の三役と常置委員会は重く受け止めています。そのことから、東中国教区を構成する各地区の皆様から広くご意見と現状についてのご報告を賜りたいと願ひ、各地区集会への問安を計画いたしました。

十一月末日現在、鳥取県西部地区、鳥取県東部地区、岡山県西部地区、岡山県東部地区、岡山県中部地区それぞれの会に出席させていただき、岡山県北部地区には二〇一六年一月以降に訪問を予定しています。

鳥取県西部地区による「地区のつどい」は、十一月三日(火・休)午後一時から三時まで米子教会で開催され、三役が出席いたしました。開会礼拝の後に「これからの東中国教区」と題して嵐護議長による主題講演があり、上井教会の田中英也さんの司会により質疑応答のときがもたれました。常置委員会の信徒と教職を構成する割合に關しての問題提起はなされましたが、構成割合を変更することの理由、その施策が目指す目的などについての説得的な根拠が述べられていたのではなく、執行部としてもご提案の意図について充分に理解できたわけではありません。教職への不信という点に

おける意見表明としては十分に反省をしつつ拝聴いたしました。そこから信徒と教職の割合を変更することによって、昨年度、教区が経験したような混乱を回避したり、教区運営上の連絡体制が整備されるということが根本的に説明されているわけではありませぬ。問題提起を踏まえてなされてきたご提案が、今後の教区運営をどのように変えることとなるのかの説明されることで、この議論は今後の東中国教区が果たすべきミッションの中において積極的な話し合いの舞台を提供することとなるのではないのでしょうか。

鳥取県東部地区による「地区の集い」後の反省会及び地区委員会は、その一週間後の十一月十日(火)午後六時から八時半まで、湖山教会にて開催され、三役で参加いたしました。森嶋道地区長の司会により懇談のときがもたれ、嵐護議長による奨励に耳を傾ける機会を得ることができました。ここでも常置委員会の構成割合について時間が割かれ、三十分を予定していたところ二時間にわたる協議のときとなりました。当初予定されていた時間以上にお付き合ひ頂いた諸関係者の方々には感謝しています。問安に対する熱意の表れとして励まされました。地区会の中では、直前に開催された地区大会において、鳥取県東部地区の信徒同志のつながりが見つめ直されたり、自分たちの信仰への振り返りがなされたり、励まし合える場所として育まれているように感じました。もともと、この地区会のアイデアは岡山県中部地区伝道協議会による地区大会であったことですが、アイデアを

相互に共有して恵みを分かち合える教区形成をする努力がきめ細かいご奉仕によって支えられていました。

岡山県西部地区委員会は十一月十五日(日)午後一時半から三時まで、鴨方教会にて開催され、嵐護議長が出席いたしました。昨年は当地区において「教会は教師のものか、信徒のものか」をテーマに研修会を開催し、教職や信徒のものではなく主のものであるという気づきが学びを通して与えられています。また、各教会にとっては地区の交流は近くても、教区となると遠く感じられ、教区総会でも発言する人が決まっております。総会では分科会などを行って、教区内の対話を紡ぎ出していくしくみがほしい、などの発言がありました。

岡山県東部地区協議会は十一月十七日(火)午前十時から正午まで、旭東教会にて開催され、嵐護議長と大塚忍副議長が出席いたしました。当地区でも活発な意見交換がなされ、「信徒と教職が支え合うことが必要」「信徒の教職への不信感だけでなく、教職同士でも不信感を持ち合っているのではないだろうか」「信徒議員が教会員の意見をどれだけ代表しているのだろうか」「教職が召命感と思ひ込みを混在させてはいないだろうか」などのラディカルな意見が交わされました。

岡山県中部地区伝道協議会は十一月十七日(火)午後一時半から四時まで、琴浦教会にて開催され、三役が出席いたしました。教区を見渡してみると、しばしば信徒から教職への高度な要求がなされることがある

けれども、何の奉仕もせずというだけか、自分自身が組織に関わって賜物を捧げようとしているかによって違いがでてくるのではないか、また、我々は互いを執り成して教区を形成しようと自らが参与しているだろうか、という問いかけや振り返りがなされていました。

このたび三役は各地区を訪問させて頂きました。それぞれの地区には特徴もあり、課題もあり、困難と共に喜びをも共有できる共同体として機能し得る可能性を見出しつつも、部分的には援助や励ましも必要であることを実感いたしました。教会は主のものであるという岡山県西部地区の学びからいえば、教区もまた主のものであるといえるでしょう。各地区ともに弱さや苦しさが目立つ状況を実感されています。しかし「神は、見劣りのする部分をいつそう引き立たせて、体を組み立てられました。それで、体に分裂が起らず、各部分が互いに配慮し合っています。ひとつの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、ひとつの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです(第一コリント十二章)」という御言葉は、教区にも語られているのです。信徒と教職、教会、地区、教区というつながりには必ずや聖霊が働き、私たちの思いもよらないところに神の恵みが注がれることと信じています。教区からの各地区間安を受け入れて頂き感謝いたします。総じて高齢化の進む中で懸命に教会を守っておられる信徒と教職の御姿に感銘を受けました。教区でお互いがどのように支え合っているかが喫緊の課題です。これから共に教区を通じて神へと賜物を捧げて参りましょう！

教区伝道協議会に参加して

倉敷教会 宮脇俊昭

去る十月十二日、教区伝道協議会(岡山県側)が倉敷教会を会場に開催された。会のテーマを「今後の教会どうしたらいい」として、岡山県内十一教会から五四名の方が参加しての開催であった。講師は、今年四月に稚内教会から旭東教会に赴任され、昆布、いやキリスト教の伝道に励まれている森言一郎牧師にお願いした。森先生が前任地で昆布バザーを通して地域と教会の交わりが強められた事、さらに教会財政に大きな力になった事などから話しはじめられた。

その中で私の印象に残った事は「今日は雨で教会に行きにくい。まあ私が行かなくても他の人が行くだろうからいいか」と思うのではなく「私が行かなくては牧師が壁に向かって説教するかも知れない」と本気で思う人が教会を教会たらしめていくのだ。教会のために命がけになっていただきたいという言葉でした。「命がけ」と口で言うのは簡単ですが、これほど重い言葉はありません。しかしイエス様は私たちのために命を投げ出された事を森先生のお話を通して改めて思い返しました。本気で教会のために働きたいと思いました。

第二部として中部地区で活躍(暗躍)するヨルダン会の活動を、世話人の琴浦教会佐藤隆司兄から報告して頂いた。ヨルダン会は別名「夜談会」とも称し夜の活動が主と思いの方もおられましようが、このところ昼間の活動が目覚ましいとのこと。皆さんご存知のように岡山県中部地区の総社



教会の再生に多大な力を貸して下さいました。ヨルダン会からの呼びかけで教区内の若い兄弟たちが総社教会の鬱蒼とした駐車場を開墾し、さらに礼拝堂の内部や屋根外壁の修理してくださいました。特に駐車場の大きな岩や切り株の除去は人力では困難なため応援を求めたところ用瀬から重機を持ち込み整地された事など地区にこたわらない活動がなされたことが報告されました。口で言うだけでなく実際に働きながらヨルダン会メンバーの交わりも進められている様子に打たれました。

森先生、佐藤さんの時間に囚われない熱い語りのため分団協議は全体協議に予定を変更し難波幸矢さんが名司会により参加者から感想を引きだして下さった。その中で「自分の子どもが行きたくなる教会はどのような教会か。そこを皆さんで真剣に語り合う機会を作る必要があるのではないか。」という感想が語られ、自分の子どもが教会に繋がっていない者としておおいに考えさせられる時でした。

第3回教会再建ワークキャンプ報告

教育委員会委員長 奥田 望

九月二日(火・休)―二三日(水・休)の日程で、宣教部教育委員会主催による、第3回教会再建ワークキャンプを開催いたしました。今年は勝山教会でのワークを久世教会に拠点をおいて行うことができました。

以前に鳥取県東部地区の青年たちを中心とした清掃ボランティアが行われた時のことを思うと、その後の改修によって両教会ともずいぶんと整えられており、また実際にそこで礼拝をはじめとする教会活動が行われているという実感を現地においても与えられ、励まされる中でワークを行うことができました。

また本年は岡山県北部地区の勝山教会という地区外の教会が会場であったにも関わらず、岡山県中部地区壮年会(ヨルダン会)の方々も総社教会の時と変わらぬどころか多くの方が泊まりがけでの参加という、今まで以上のご協力をいただけたというのにも大きな感謝でした。

一日目は久世教会に集合時間前に集合が完了するという驚くべきスタートを切り、松井初委員による開会礼拝をもってはじめられました。その後、昼食をとりながら参加者同士の交流、自己紹介、また久世教会、勝山教会のこれまでと現在の歩みについてもお話を聞かせていただくことで、ワ

ークをはじめめるにあたって思いをあらたにされつつ、いよいよ勝山教会へ移動してワークが開始されました。今回の具体的な作業内容といたしましては外壁の洗浄、窓枠、玄関扉の塗装、屋根の塗装、裏庭の除草などが二日間にわたって行われました。1日目の作業を終えた後に宿(なつかしの?真庭リバーサイドホテル)に移動し、チェックインを済ませて、ふたたび久世教会にホテルのバスで移動し、そこで夕食のバーベキューをいただき、楽しく英気を養われました。

二日目は昨日からのワークを仕上げるべく朝から勝山教会においての作業が本当に終了のギリギリまでなされました。その間には同時進行で久世教会において準備していただいたカレーライスが運び込まれ、おいしい昼食をいただくことができました。閉会のときは、森嶋道委員によってそれぞれの作業の報告、感想などを共有することができました。達成感や心残りなど自分が携わっていない作業についても聞かせていただき、今回のワークキャンプの全貌をそれぞれ胸にして勝山教会を後にしました。

今回は勝山教会でのワークのために久世教会の方々が、まさに自分たちのことのように全面的にご協力いただきましたことには心からの感謝とともに感動すらいたしました。このようなご協力なくしては今回のワークキャンプは不可能だったとすら思われます。

しかし、そのようなご協力をいただきながら、委員長の思わぬケガ、入院などによって委員会活動を停滞させてしまったことにより、皆さんへの呼びかけなどが不十分になってしまったことはしっかりと受け止め、より皆さんに資するワークキャンプとしていかなければならないと痛感させられています。

今回のワークキャンプを通して私たちに出会いと交わりを提供してくださいました勝山教会は勝山の素敵な町並みの中に建つ素敵な教会です。皆さんも一度お出かけになってみてはいかがでしょうか。



教師と信徒の合同研修会報告

教師部委員長 山本博之

今年度の研修会は、二〇一五年十月二十七日(火)日本基督教団岡山教会に於いて、「教師と信徒の合同研修会」として、教師部委員会と教育委員会の共催で行いました。講師には、日本の宗教学者であり、ドイツ思想史研究者として活躍しておられる、金城学院大学人間科学部教授の深井智朗先生をお招きし、「教会は何を信じ、何を伝えるか」と題して、二回のご講演をしていただきました。参加者は教師十五名、信徒三十七名(計二十教会、五十二名)でした。

日帰りの研修会ということで、時間が限られておりましたが、参加者のお交わりも大切にしたいと思い、開会前に「ウエルカムランチ」として、お弁当をいただきました。交流の時間を取っていただきました。

開会において嵐護教区議長からご挨拶をいただき、開会礼拝を山本博之牧師(教師部委員長)により、「からし種ほどの信仰」と題して、マタイ一七章一九―二〇節から説教がなされました。

講演Ⅰは、(1)伝道はどこからはじまるのか、なぜ伝道するのか:「救われた喜び」からはじまる (2)わたしたちは知っているのか?何を伝道するのか:福音なのか、カウンセリングなのか (3)伝道と礼拝:聖書を読む力と生きる力 (4)家族:日本の家庭とキリスト教 (5)「教会外のキリスト教」?

：ドイツと日本 (6)出てゆこう!：「神の喜び」としての伝道 など、先生のエピソードを交えて、終始笑い声に包まれた講演でした。休憩時間も先生は控室ではなく、参加者と一緒にその場におられ、珈琲をいただきましたながら和やかにお交わりをされておりました。

続く講演Ⅱでは、教師向けにご準備くださったということでしたが、「教会の課題」について、神学用語は使わずに、わかりやすい言葉でお話しくださいました。

講演を受けての質疑応答も活発に行われ、最後に、大塚忍教区副議長による閉会祈禱によって会を終えました。また、柴田委員のご厚意で、研修会に参加された方に「からし種」のプレゼントもありました。

以前、私が深井先生のご講演をお聞きし、お交わりをさせていただいた際に、神学用語は極力使わず、適切な例話を用いて分かり易くお話してくださいということが強く印象に残り、いつか、何かの機会でお呼びしたいと考えていたこともあり、深井先生を講師として依頼することになったのですが、研修会の講師プロフィールを見て、難しい内容だろうと覚悟?して参加された方も少なかつたようで、参加された教師・信徒の多くの方から、分かり易く、とてもいい講演だった、素晴らしい講師だったとの感想をいただき、今回、東中国教区の教師や信徒の皆様にご紹介する機会が得られたことに、只々、主の御名を崇めます。

研修会を開催するにあたり、教師部委員

会では、教師研修会の過去数年間の報告から、例年、二月に一泊で行われていること、参加者が二〇名未満であるという課題があることを確認しました。参加者が少なくなっていることの原因が何にあるのかについては、確かなことはわかりませんでしたが、思い切って一日開催に変えて実施してみようということになり、今回のような形になりました。残念ながら教師の参加人数は今年も二十名を超えることは出来ませんでした。が、信徒の参加が多くあったこと、また、限られた時間の中でも、深井先生のお話と先生ご自身のお人柄を通して、一人一人が自分の救いの喜びや信仰の体験を伝えていくことの大切さとその情熱を一杯にいただくことが出来たと感じられ、感謝しております。

教会紹介

光明園家族教会

光明園家族教会長老 難波幸矢

光明園家族教会はご存知のように、国立ハンセン病療養所内にある教会です。全国に国立ハンセン病療養所は十三あります。そのうちの二つが岡山県にあります。長島愛生園と邑久光明園です。長島愛生園が有名ですが、創立は光明園の方が二〇年古い

のです。全国に十三しかないのに、なぜ岡山県に二つあるか。邑久光明園は、もともとは大阪にあり、当時は外島保養院と言っていました。ですから教会は外島家族教会でした。「家族」と命名したのは、家族と離れ、家族に迷惑がからないように縁を切り、偽名で生きる人の多い病者を気遣って、伝道に通って下さっていた福田荒太郎先生だと聞いています。

一九三四年の室戸台風で療養所は壊滅します。患者と職員とその家族を合わせて一八七名の人々が亡くなりました。再建を千里など大阪府内で考えたのですが、地元の反対などがあってできませんでした。そこで当時長島の七五万坪を使用していた愛生園の後ろに、二五万坪まだ余裕があるという事で長島での再建となりました。一九三四年の台風から四年間、生存者は全国の五個所の療養所に振り分けられて邑久光明園での開設を待ちました。

全国の入所者は、一五年五月の調べで、一七一八名です。(因みに光明園は一三二名でしたが現在すでに一三〇名を割っています。その中で家族教会の現住陪餐会員は二三名です。)年間八〇名余亡くなっています。平均年齢約八四歳です。

光明園家族教会は、創立一〇〇周年の記念会を二〇一二年一月一日に持ちました。狭い教会に入りきれないほど、一〇〇名を超える方々が神奈川や九州からお祝いに駆け付けて下さいました。「どうせそんなに集りゃあせんよ。でも一応一〇〇周年だ



し、もう次はないからやっておこうか」という私たちの思いをたしなめるかの如く集まって下さいました。

私たちの教会が、いわゆる教区内教会と違う所は、やがて閉教するということです。療養所がその任務を終える時家族教会も閉じます。それまで体力気力が続く限り礼拝と祈禱会を守りたいと願っています。明日にでも「もうやめよう、これ以上できんよ」と弱音を吐いてみたり、「週報、また間違っただけだよあいいか」と開き直ってみたりの実状です。

そして無牧(大塚牧師が代務)の私たちの教会は、現在一か月に礼拝と祈禱会の説教者八、九名の牧師に来て頂いているのですが、日曜日の礼拝は引退牧師を中心に、祈禱会は長く相生教会や岡山中部地区の先生方が来て下さっています。感謝なことです。二〇一五年の春から倉敷教会は「毎月最後の祈禱会は光明園で」と決めて下さったとのことで、信徒のみなさんが沢山来てくださいます。嬉しい驚きです。

そんな中で、在日大韓基督教会の関西聖歌隊連合の方々が毎年来てくださり、美しい賛美と説教、そしてゲームなどをして楽しんでいきます。今年面白いことがありました。来て下さるのは嬉しいのですが、なんせお聞きする方が四、五名(昨年は三名)で、「あまりに申し訳ないから今年を最後にして下さい」と言いました。そのつもりで関聖連の方々もいらっしゃいました。それなのに、ゲームが楽しかったり、それぞ

れの一言発言の中で「以前は光明会館の方で歌っていました。パイプ椅子をみんなで並べました。それで驚いたのは、その椅子の背中に、寄贈した人の名前が書かれていて、牧師をしていた私の父親の名前だったんです。そんなに昔から訪問していたんですよ。」と言う方がいたりで、「今年で終わりに」とイチバン言っていた花村さんが「来年もお願いします」と言ってしまうて皆さん大笑いとなりました。みんな同感!という感じで、嬉しい拍手が鳴りやまず、互いに背中を撫であい、来年を約束してお別れしました。仕事のある人たちが遠くから一つの教会に集まり、練習を重ね、遠いところを来て下さる。なんという嬉しい事でしょう。本当に勿体ない事です。

教会紹介

米子錦町教会

米子錦町教会役員 吉岡 俊

米子錦町教会は、一九三〇年米子基督教伝道館として発足。B・F・バックストン(日本伝道隊長)、柘植不知人師(基督教伝道隊)の流れを汲む信仰のグループです。基督教伝道会「活水の群」の一教会として、御聖霊を仰ぎつつ信仰の道を歩んでいます。

教会は鳥取県西部、国道九号線に面し米子市公会堂が近くにある商業地区です。周辺は高齢者の多い所で、子どもが遊ぶ姿が見られません。一九八八年、借地一二三坪



(時価一億円以上の物件)を五五一六万円で購入することができました。現会堂は一九九二年(延床面積九三・二坪、鉄筋一部二階建牧師館併設)に、建設費五五五万円で献堂しました。信徒の熱烈なお祈りと神様の不思議な力の働きに感謝します。当時の川崎善三牧師は大変なご苦労があったと思います。先生は一九七八年より三三年間の牧会でした。改めて感謝申し上げます。教会は現在陪餐会員五〇名、礼拝出席者四〇名前後です。礼拝後ティータイムをもち、信徒間の交わりを深めます。お茶菓子は各自が持参した物が役立ちます。第二日

曜日の礼拝後に婦人会、男子会別々に集会をします。婦人会は讃美歌を歌い、牧師のメッセージを頂き、軽食を食べながら証し等をして交流をします。男子会は讃美歌を歌い、活水誌に記載されている柘植先生の説教を輪読します。婦人会手作りの軽食を食べながら、交わりの時をもちます。婦人会と男子会は年に一度、教会外に出ます。讃美歌を歌い、牧師のメッセージを頂き、弁当を食べながら楽しい時を過ごします。大山寺、花回廊等に行きます。会員外の人にも大歓迎です。敬老の日には 七五歳以上の人にプレゼント(和菓子中心)をします。今年は二三名で、高齢化が進んでいることが窺えます。両会とも年会費三百円です。慶弔規定があり、傷病時はお見舞金を出します。クリスマスには礼拝後祝会をします。愛餐会の後、ゲーム等楽しみサンタを迎えプレゼント交換をします(三百円程度を各自持参)。輪を作り手渡ししていきます。受け取った品物と聖句を披露します。燭火礼拝には、仕事等の関係で日曜礼拝に来られない人の顔も見られます。子どもクリスマス会は、会員のお孫さん、求道中の母子等三〇名ほどの集まりです。役員さんのお話を聞き、ゲームをした後サンタからプレゼントを頂きます。また教会で、【ゴスペルオーブ】(主宰小徳浩子姉)のコンサートを開きます。六〇数名集まります。四〇名前後は教会外の人で、若い人への伝道のためとなっています。

召天者合同記念会は、春と秋の年二回あ

ります。牧師奨励の後、召天者の名前を読み上げ偲びます。有志で墓参をします。墓地は市内勝田町にあり、納骨堂と個人の墓四墓があります。奇数月には、礼拝後月末感謝会をします。婦人会の手作りの軽食を食べながら、誕生日の感謝等の証しをしています。讃美歌21を使い始めてから三年目になります。歌詞共に馴染めない面があり、小徳姉より指導を受け一曲ずつマスターしています。祈禱会は毎週水曜日に開かれ八名前後の集まりです。木曜聖書会は隔週で開かれ九名前後の集まりです。

現在の牧師は八代目小野澤照夫牧師です。二〇一一年に着任されました。年間聖句「熱心で、うむことなく、霊に燃え、主に仕え、望みをいだいて喜び、患難に耐え、常に祈りなさい」ローマ人への手紙二章一一、一二節を頂いています。神に喜ばれる教会、重荷を負うて苦勞している人達の憩いの場所、祈りの場として光り輝く教会でありたいと思います。

東中国教区按手礼式報告

教区書記 中井大介

去る十一月十六日(月)東中国教区常置委員会後、米子教会において嵐護総会議長の司式により野々川康弘牧師の按手礼式が執り行われました。式の中で所信表明がなされた後に、嵐牧師の前にひざまずき、会場に参列した正教師たちが野々川康弘先

生の頭と肩に手を置いて按手し、祈りが捧げられました。これにより鳥取県西部地区と米子教会にまた一人の正教師が立てられることとなり、主イエスの降誕を前にして喜びを共に分かち合うときとなりました。按手礼式と礼拝が終わると、大塚忍副議長より祝辞があり、そこでは、正教師として聖礼典の執行を何度執行行っている、そのたびごとに、これから第一回目の式を執り行っていくという気持ちを大切にしたいというメッセージが語られました。また、教区からは記念品が贈呈されました。参列された方々とともに記念撮影をしてから、米子教会礼拝堂において茶話会が催され、鳥取県西部地区長の小野澤照夫牧師と、かつて野々川康弘牧師が神学生として過ごされた津山城西教会の主任である山本修一牧師、信徒を代表して鳥取教会の松田章義さんから、それぞれにお祝いの言葉が述べ



られました。按手礼式の中では、マイクを手にする方々が、たびたび「祈りと御言葉の奉仕」について語ってくださいました。新しく教師が立てられることの喜びとともに、まさに献身のしるしとしての野々川康弘牧師が、主と共に歩まれる牧者として御言葉に仕える奉仕者であってほしいと願う思いが会堂に満ちていました。茶話会とともに野々川康弘牧師が藍さんと席を並べ、本心に嬉しそうに語らい合っていたお姿に、一同、感激を覚えました。これからますます主に用いられる器として野々川康弘牧師が御言葉に生きる者となり、米子教会の皆様とともにあって、主を宣べ伝える働きがなされますようにお祈り申し上げます。

編集後記

教区三役問安報告や按手礼報告をはじめ、充実した誌面となりました。活発な教区活動の一場面をお伝えしていきます。(A・F)

